

この地に三十八人、夜久実守とその家来たちでしようか戦死者が永眠していることになりました。今から数えて一、二三年前のことですから、無論墓などある筈がありません。

さて、次はここで戦死された人々は、何のため、どこに葬られたかということですが、これは難問ですが、位牌の後者「真空通叟条達居士」の裏書でわかることは、この居士は薩摩の人であること、夜久と一戦したのが夜久方が強く、終に降参し左に北と戦死して不明であったが夜久実守とゆかりのある者とわかつたので同葬する、向後夜久家の左に護つてくれるように、との意味のようです。

この戦が薩摩人と戦つたことすれば、其の後の歴史にもあるように、薩摩、日向方面から遠征して来たもので、単人旅か日向人か、とばかり日向方面から攻め込んで来たと考えられ、三河内から石神峠を越して黒沢に出たか、名護屋方面から夷峠を越して来たか、何れにしても市福所へ出る道は一本。そこでこの地一帯で攻防戦が展開され、たて身ろうことば、想像出来ませんが、勿論これは仮説に立つてのことと、それ以上のことは判明しません。

西垣藤枝さんが足田先生を訪ねられた時は、この戦死の地八丁四面の平地はまるでおかしなやつたのでありました。

こうしたことを書きつづつていた時、たまに末羽紫先生から、増村隆也先生から来ていた手紙を見せて頂きました。

それは只今埴路市に御在住の、夜久義重氏よりのおたよりで、先祖夜久実守戦死の地をたずねてはるはる佐伯に來られ、一度目は土地不案内のため目的を達せず(一歩

合岸河内の千人塚など見られたものでしよう。増村先生著「佐伯郷土史」によつて二度目の米訪でこの市福所に來られて目的を達し、帰途増村先生に會つて厚くお礼の言葉を残して去り、「先生の著書のおかげで、先祖が埋れておられるおさう縁故の土地も判明し、今後は機会を捉えてお詣りもしたいと存じます。ほんとは有難う御座いました」と云う感謝に満ちた手紙でありました。

こんど友人達のおかげで、郷土の歴史が解明されて行くことは、まことにうれしい事です。

速国に祖先の霊をとむらう——それはなか／＼出水といことで、私も岩田家の先祖の地、佐賀県神埼郡神埼町岩田を訪ね、お墓まいりもし、調査もしたいと思つていますが、未だにその機会を得ません。

(かあり)

研究

郷土の歴史を探る

(三) 南北朝の争乱と佐伯地方

会員 古藤 田 太

大友一族が、文永(一一七四)弘安(一一八二)の困難には逐次演じた事々周知の通りである。歴史は巡る。僅かに五十年後には建武の中興(一一三三)となつた。天皇親政の理想は、現実的に多くの矛盾を暴露し、例えは新政府が早々公布した「個別安堵法」の如く、あらゆる所領は醍醐天皇の安堵の論旨によつて、初めて其の所領を確立されることとする規定である。この為安堵状を求めて全国津々浦々から陸續として京都に集まる群衆は、社会混乱と惹起し、又幕僚の支障をも来たした。其の善後策として

て、早く北望七月之と撤回し、一高野法師党類以下朝敵
本陣の輩の外は、（一三三五）と新令を發布せざるを得なかつた。
又天皇親政は多くの武士の反感を買ひ、天下の人心は離れて、建武二年（一三三五）十月、足利尊氏の登場を
迎えた。

尊氏は延元元年（一三三六）二月、新田義貞・楠正成等
の爲に大敗し、兵庫より海路九州に着き、少貳殺高の出
迎とうけて上陸した。西下の尊氏は、一が月後に九州を
平定して、多々良兵に菊池・阿蘇の連合軍を破り、これ
より九州の諸勢の多くは尊氏に従つた。僅かの間に軍勢
を擡て直すと、九州・中国の諸兵を率いて、延元二年四
月大宰府を路つて東上し、濠川の戦で楠正成を破り、京
都に入つて足利幕府を開いた。

南北朝の争乱は、日本史上最も忌おしく、信義地に遺
ちた時代であつたが、其の真相は筆舌に尽し難く、両朝
の対立、懐良親王の九州下向、尊氏義詮父子と弟直義、
又師直兄弟の入り乱れでの争闘が続き、中央の争乱は其
のまま九州地方に投影して、勢力派閥に波乱を生じたこ
とは、一つの特長であつた。

正平六年（一三五〇）よりは、直冬が九州入りとなつて、
曾根兼光と誘略した。佐伯地方の人心もこの影響
を受けて揺ら動いたことである。

世の中に武者起りて、西東北南いくすならぬ所無し。
うち統さ人の死ぬる数、聞くおびただし。まことこと
も覆えぬ程なり。こは何事の争ひぞや。哀れなる事
のさまかなと覺えて、

死出の山越ゆる絶え間はあらむかし
なくなる人の数、つきつ

と、西行法師の歌はこの時代が有様をも物語つていふよ

うに思える。

九州より東上する尊氏に従軍した大友隆下の將兵を、
角達一揆（（一三三六））と称した。一揆衆の名簿の中には佐
伯氏は含まれてないばかりか、尊氏はこの角達一揆に対
する恩賞として、正平元年（一三四六）佐伯莊のうち、佐伯
山城守惟賢分所領と北海部柳小依井卿榮野筑後入道分所
領と与えている。大友文書録や薬師守本角達一揆（（一三三六））
書によると、七代大友氏は配下の氏族から將兵を選ん
で、東上する尊氏に大友軍の代表として参加させたもの
であることが判る。恩賞の理由は、「御方に参るに依り
行ふところである（尊氏に従軍したから与える）」とされ
ている。

この角達一揆の恩賞所領をもつた佐伯山城守惟賢とは
どのような者であるか。佐伯氏系図によると、山城守
惟賢は佐伯氏八代惟秀の子で、系図の上からは当然佐伯
氏の家督を襲いでよい人のように思われるが、九代の
家督は惟賢の子惟世が継いでいるので注目値すること
である。正平二年（一三五〇）十一月懐良親王の「佐伯莊の
地頭職は南朝側で支配する」という趣旨の令旨からも、
佐伯地方は山城守惟賢を中心とする南朝側の勢力が存在
していた事が解る。

南朝側の勢力が中央で振るわなくなつた延元三年（一三
三六）、後醍醐天皇は皇子達と地方に派遣して勢力の挽回
を図られ、九州には征西將軍として懐良親王が西下さる
ることとなり、延元四年九州に入られた。惟賢は天下の
形勢南北勢力伯仲する当時から南朝側として活躍したこ
ろである。弥生所小倉磨崖塔に造立年次並に造立者とし
て「康永四年（（一三五五））惟覚」とあるが、同じ塔群中には
嘉慶元年（（一三五七））大神惟武」とあると同様佐伯氏の者である。北
朝側は北朝年号を使用し去と考ふるなら、康永は北

朝年号で、佐伯氏の中に北朝側に加担する勢力があったことを示唆するものであろうか。

日向記によると、足利尊氏の麾下に伊東六郎左衛門尉祐持と云う者がいて、豪勇無双、日向の南朝軍を制圧するのには軍功を樹てた。尊氏に従って東上し、湊川の合戦においても比類なき勇者と認められたが、尊氏は日向の僻遠の地を護るために急ぎ下回させた。祐持は其後、^{山七}郎義興と任務を交替して、佐伯惟長の督となり佐伯^{山七}に注丸、因中安泰におさめて十三年の春秋をおくつたと記されている。佐伯惟長とは佐伯六代惟宗の弟、是嗣^{山七}理亮惟長のことであらう。日向国史によると、正平三年六月、新に檢非違使に任ぜられた伊東祐持が、京都に赴任し途中佐伯惟長、館を討ち、美濃に滞在したとある。延元二年（二三三六）より正平三年（二三三八）頃佐伯氏持に有力家の中にも、北朝側に加担する者があることを証するものであろう。

前述一揆に与えた山城守惟賢の所領は、佐伯荘の一部で、角違一揆に出兵は無かつたが、佐伯氏の大勢は大友氏泰に加担し、北朝側勢力が大勢を占めていたと史料されるのである。當時に於いては勝利を得る者は南朝が北朝多くの武将はこゝのために迷い、去就の変転を重ねてゐると云つていいだろう。

かかる乱世に多くの一族郎党を率いる者が「家」を護持せんとすることは困難なことであつた。後年、永享七年の姫岳の戦は幕府が関与して、四國、中國の兵を僅十程の大乱であつたが、田北親増は大友持直の党として姫岳に籠城し、親増の子宮徳丸は元服前の小童であつたが敵方である大友親綱の味方として、父子相別れて参陣した。又志賀道輝の子道易へ親孝、親慶、親度と称するは、天正廿二年頃より島津軍に通謀せんとする下心が取り、

大郎親善（別名親次と称し、当時十八才）に殊更に家督を謀り、天正十四年（一五六六）島津軍の侵寇に當つては父道輝を親善は大友方として忠勤を励み、道易は島津軍に加担した。このことは当時、武士が勝敗の見通し立たず、何れの陣営が勝利をおさめても「家」を存続出来るよう思ひついた深い智慮であつた。争乱の社会が生んだ悲しい現実であつた。

佐伯山城守惟賢は、佐伯氏を護持するために独り南朝側に奔つたものであつても、知れない。道義の荒廢、主義主張の相違によつて、親子兄弟が相分れて攻防する姿と平質的に相違するものがあるように思える。後者の例は数多く挙げることが出来る。七代大友氏泰の弟に氏宗、氏時があり、八代の家督は氏時が継ぎ、南朝側の勢力強んとあつた正平十一年（二三五六）には、大友氏時とむむく一時南朝側についたが、氏宗は節を握らず、存心し、遠く隔たる因東、直入、佐伯地方で兵を募り、氏時等々南朝側に抵抗した。

度々豊後討伐を行われた懐良親王と佐伯地方との関係は、郷土史の深い関心事である。正平十一年（二三三三）九州に多年覇を唱えた一色氏は京都に去り、九州は少貳親尚と、懐良親王、菊池武光の対立となつた。正平十四年^{（北條時義の戦）}大宰府の戦に宮方は大勝し、正平十六年八月懐良親王は大宰府に行在所を設けて、征西府が移された。正平十五年より斯波氏経が鎮西探題として下向したが、宮方の勢力を制圧することが出来ず、正平十九年空しく帰落した。文中元年（二三三二）今川了俊の下向まで、即ち正平二十二年以降、征西府の勢力が縮小され、征西府が南朝側に席捲されて、征西府の黄金時代が続いた。弥生所尺間の處にある宝篋印塔には、文中、天授の年号が刻まれている。この石造遺物は、征西府の勢威華やかなりし頃のものとある。

以下は、文中、天授の年号が刻まれている。

（尋常科）ムが出場することになつていたので、赴任した日から本矢君と練習を以てました。このチームは五年生ノ頃からよく練習していて上手な児童が多く、その中でも投手の椀間君（当時）佐伯高寺女学校長椀間俊華氏の御子息）は名投手でした。五月に大分市で大分新聞社（現在の大分合同新聞社）主催で東九州少年野球大会が開催され、我がB組チームは逆よく優勝し、来る八月に空塚で行われる全国大会に東九州代表として出場することに成りました。それから八月七月と暑さに負けず毎日毎日猛練習を重ねました。阿南卓先生が毎日お出でになり指導して下さいました。高妻校長をはじめ皆んなの先生方の激励に選手たちは一生懸命に練習して、五月ノ頃とは見違えるほど上達しました。よく先生チームと練習試合もしましたが、その時此度高妻校長が投手を買つて出ていました。（実は投手にしないといふ気が悪かつたのです）。私は毎日の練習で遂に疲気（顔面神経痛）にかかると、どうとう大会には選手に付添へて行けなくなつて、高妻校長自ら選手と引卒し、阿南先生が監督となつて遠征しました。が、武運独なく第一戦で敗退してしまいました。十五年度の新学期を迎え、職員一同張切つていました。が、六月高妻校長が急に退職して、北海部郡から佐藤喜一校長を迎えました。私は札幌から昭和三年三月まで佐藤校長の下に勤務して大高小學校へ転任しました。

（終）

（28ページ下段より）

春霖となるかもしれぬ。そしたる当分、雨の城山を訪れる人もいないたもうと思つたりしている。

（住所 宮崎県日向市美々津町）

（7ページ下段より）

先述した弥生町小倉の磨崖塔造立年次、康永四年は北朝年号で、この辺りが北朝全盛かを頃々ものである。これは南北朝争乱の消長を物語り、この平和な佐伯地方もかつて争乱の渦中にあつたことを示している。南朝年号といひ、北朝年号と謂う、当時の争乱の名残りを留め、更に権力の推移を物語る貴重なるものであるか。（終）

（住所 北海部郡弥生町大字江良）

朗報。三の丸の御殿、移築への動きが……。

かねてからその取壊しが決定してあつた三の丸の御殿が、市内某地区の切なる要望により、船頭所河畔の市有埋立地に、移築・保存の動きを見せている。喜びはたえない。願わくば今の御殿の姿を、出来るだけそのままに移して、後世にのこされるように。

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土誌クラブ顧問

本会会長 市野 順

仁

第二章 佐 伯 港

第二節 その社会的環境（つづき）